

「人間・北川宗藏」研究をめぐって 中村福治が遺したもの

田 中 照 純

1. はじめに

我が国における経営学の歴史を振り返れば、そこに一人の極めて魅力的な研究者が浮かび上がってくる。いや、その人物、単に経営学の研究者というだけではない、現実社会の中で生きた人間として、その生きざまは尋常ではなく、知るほどに人々の心を揺さぶり強烈な印象を与えずには置かない。それこそが北川宗藏という人物である。しかも、北川の生涯はわずか49年でありながら、その間に凝縮された生の軌跡は、一人だけの人間としてはとても語り尽くせないほど、豊富で多様な内容に充ち溢れていた。言わば、北川宗藏という人物はただ一人でありながら、そこには幾人もの人間の生き方が描き出されている。だからこそ、その波瀾に富んだ生きざまは、知る人の心を強く捕らえて離さない。すでに彼が世を去って50有余年を閲しているにも拘わらず、その人物像は未だ多くの人々の胸中に深く刻み付けられている。

そうして、知る人ごとに必ず強い衝撃を与えずには置かない北川宗藏、その人物を研究対象に据え、彼の経営学者としての学問的営為のみならず、生活者として、また実践的な活動家として、様々な側面に焦点を当てながら総合的な人間研究を試みた研究者がいた。それが本稿で取り扱おうとする中村福治である。彼も北川が放つ人間的な魅力の虜になった研究者の一人だと言ってよい。中村福治による北川研究、それは1992年に出版された彼の著作『北川宗藏 一本の道をまっすぐに』（創風社）を通して、初めて広く世に問われた。もちろんそれ以前と以後にも、北川経営学に関する研究は存在するが、中村が遺した詳細でまた独特の方法による研究成果に比肩しうるものはない。

そこで以下、本論ではそうした中村福治による「人間・北川宗藏」研究に焦点を当て、彼の研究成果に潜む独自の特徴について述べてみたい。北川研究の内部を貫く中村ならではの独自性とは一体何か、それは彼が遺した研究方法と研究内容を探って行く中で浮き彫りにされるであろう。

2. 「北川宗藏」研究の方法

中村福治が取り扱った北川宗藏なる人物に思いを巡らせば、前述の如く、そこには他に比べようのないほど多彩な人間像が描き出されてくる。短い生涯でありながら、まるで幾人もの生き方を繰り広げたかの如く波瀾に富んだ人生を送った北川、そうした人物の生きざまを克明に描き切るには、一体どのような研究方法が求められたのか。

中村のとった方法は終始一貫しており、その意味では揺るぎのない徹底したものであった。北川の青年期から始めて世を去るまでの一生涯に研究の光を照射し、それぞれの時代に展開された北川の生き方と、彼を巡って現れた様々な人間との関わりを、細大漏らさず追跡して行く。もちろん、北川という人間も社会的存在であり、また、人一倍親しみ易い性格からも周りには多くの人々が集まり、彼との間に多様な関係が形づくられた。そうした数多くの人間との複雑な関係を、まるで絡まり合った糸を一本一本丁寧に解きほぐすように明らかにして行く。このような研究方法、すなわちある人間の生涯をその人自身の心的変化、ならびに彼を取り巻く多数の人々との間に繰り広げられる人間模様の歴史と見る、それは言わば「唯人史観」とでも表現されようか。もし、そうした風変わりで大膽な表現が許されるなら、中村が北川研究で採った独自の方法、それはまさに徹底した唯人史観に基づいていたと言うべきだろう。

そのような唯人史観に依拠した北川研究を展開する際、中村はもはや彼を単に研究者の道歩んだというだけでなく、日常的な現実社会の中で生きた生活者として、さらに様々な問題に直面しながら苦悩する一人の人間として捉えようとした。もちろん、北川という研究者が描いた経営学や哲学に関する「知の軌跡」を追うこと、それが中村にとって基本的な研究課題であった筈だ。だが、実際の世界に生きた人間・北川宗藏の生きざまは極めて多様な側面を持ち、それが彼自身の思想や経営学の理論に浸透し反映され、少なからず影響を与えたことは間違いない。それゆえに、北川思想の遍歴や経営学説の変遷を最終的な研究課題とした中村にも、自らの研究方法こそが必然的なものと考えられたのではないか。まさに地を這うようにして、北川その人と彼を取り巻く多くの人々との関係を追跡し、人と人とが織り成す人間模様の歴史を映し出そうとしたのである。

もっとも、こうした研究方法を中村が取り得た背景には、一つの大事な条件が潜んでいたことを忘れてはならない。その条件とは、このような人間史の研究対象に設定される人、この場合には北川宗藏という人物自身が持っていた特性である。北川をめぐる人間関係の機微、それに影響を受けて揺れ動く北川の心理状況、そうしたものを闡明するには、どうしても北川の私的な生活領域にまで踏み込み、それを克明に物語るような物的資料の存在が欠かせない。幸い北川の場合には、彼の書いた日記や随筆、さらには彼が筆を執った新聞記事やピラノの類までが遺

されていた。そして几帳面な性格の北川によって、また彼の死後には周りの人々によって、大切に保存し続けられた多くの書き物があればこそ、中村の研究手法も十分に生かされることになる。そうした条件が成立した上で、どれほど情熱的に中村はそれらの物的資料と取り組んだことか。私は今も頭の中に思い描くことができる、北川が遺した書き物が山のように一杯詰められたダンボール箱の中から、まるで宝物でも扱うように大事そうに一枚一枚の紙片を取り出し、そこに記された北川の文章を一言一句丹念に判読して行った中村の姿を。彼はそうした紙の宝物を手掛かりにして、まるでパズルでも解くように、北川自身の心の動きと人間関係の絡み合いを探って行ったのである。

こうした中村が見せた独自の研究方法には、一方で優れたものとして積極的に評価し得る側面がある。かつて私は、経営学の発展史を追跡する経営学史という学問について、それにふさわしい研究方法とは何かを考えたことがある。経営学という学問の歴史を辿れば、そこには時代を追って様々な学説が生み出されてきたが、それらの諸学説は一体なぜある特定の時代に生成し得たのか。そして学説が発生する必然性を解明する、そのような任務を持つ経営学史なる学問は、果たして如何なる研究方法をとるべきか。その際、私は「主体の要因」なるものを重視せよと主張した¹⁾。主体とは何か、もちろん経営学説を生み出した人間のことである。あらゆる学問領域において生まれる学説、それは決して自然発生的に現れるのではなく、特定の人間による研究活動の結果として始めて生み出される。それはある人間による学問的営為の産物であり、その特定の人間なくして学説誕生という事実はあり得ない。もちろん、経営学という学問もその例外ではない。そして経営学説の生成を担う人間主体に注目し、それを深く考察しながら、何故その主体が特定の学説を生み出し得たのか、そうした研究を重ねる中で学説発生時の必然性も次第に明らかとなって行く。もちろん、以上のような私の提起した主体要因を重視する経営学史の研究手法、それは中村が採った唯人史観に基づく北川研究の方法と同じものではない。だが、両者は極めて密接な関係にある。なぜなら、北川自身の心的変化、あるいは彼が人々との間に形成して行った人間関係は、北川という一人の経営学研究者にとって自らの学説を生み出す際、その重要な主体要因に成り得たからである。そういう意味でも、中村の採った研究方法は優れたものと断じることができる。

だが、そして唯人史観に基礎づけられた研究方法の優位性を認めながら、他面においてそれが一つの弱点を内包していることも指摘せざるを得ない。その弱点とは何か、私が主張した「主体の要因」を重視する経営学史の研究手法にも共通しているが、思想や学説を生み出す主体の側の特殊な状況に力点が置かれ過ぎるという問題である。たしかに、人間の考え方や思惟内容の変化というものには、それを生み出す主体である人間自身が置かれている客観的状況から説明し得るといふ側面がある。だが、それだけでは人間が抱く思想や学説の生成根拠、あるいはその変遷過程を十全に解き明かすことはできない。そうした人間主体の状況を包み込み、

それをも規定するような社会全体の政治的・経済的な背景と結び付けた研究方法が求められる。つまり、人が抱く思想や学説の発展過程を社会変化といったより大きな基盤の下で捉えるという、ある意味では当然の考え方に立ち返る必要がある。中村もそして私も、人間主体を重視し過ぎた場合には、そうした視点からの研究方法を無視するわけではないが、どうしてもそれを後退させてしまうという問題性を孕むことになる。だが、敢えて言うなら、そのような弱点を承認するにしても、中村が切り開いた研究方法が極めて強烈な異彩を放つものであったという事実、それに異論を唱えることはできないだろう。

3. 北川の学問的営為に関して

中村による「人間・北川宗藏」研究のうち、一つの中核を成すものが北川による経営学本質論に関する部分であったことは言うまでもない。もっとも、北川自身の学問的営為は多様であり、経営学はもちろんのこと、広く経済学から哲学にまで達したという事実は夙に知られている。しかし、そうして広範囲に及んだ研究分野のうちでも、経営学についての研究、とりわけ経営学の本質を究明する問題に心血を注いだことは、彼が遺した客観的な学問的財産からも否定し得るものではない。

だが、そのような北川の経営学研究という学問的営為を巡って、北川研究の第一人者であった中村は、驚くことにそれを極めて低く評価するに過ぎない。とりわけ、経営学の本質とは何か、いわゆる経営学本質論に関する本格的な研究を開始した戦後期について、「北川は戦後、経営学研究を全く放棄していた²⁾」とまで言っている。たしかに、北川の学問的営為が戦争を挟みその前後で大きく変化したことは紛れもない事実であり、とくに戦後は哲学や経済学に彼の研究活動の重点が置かれていた。だが、北川が戦後において経営学研究を全く放棄していたかと言えば決してそうではなく、心の中にふつつと経営学への関心が沸き立ち、しかもその内容は質的に新しい段階へ向かっていたと考えられる。そこで以下、そもそも北川は戦前・戦中期から戦後期にかけて、一体どのように経営学研究を進めて行ったのか、また同時に、そうした北川の経営学研究を巡って中村はどのような評価を下したのか、などの問題を検討してみることしよう。

まず、戦前から戦中期にかけて北川が取り組んだ経営学研究について考えてみよう。その時代に、北川は自ら名づけた資本家的経営学、とりわけドイツにおける資本家的経営学を対象にして、それを精力的かつ徹底的に批判した。その当時、資本家的経営学の典型をなしたドイツ経営学を俎上に載せ、その観念論的な非科学性を容赦なく暴露して行ったのである。それは資本家的経営学への手厳しい批判であり、文字通り「経営学批判」に他ならない。そうして戦前・戦中にファシズムの嵐が吹き荒れた困難な社会的状況の下で、勇敢にも唯物弁証法の哲学

に基づいてドイツ経営学批判に情熱を傾け、そのため獄中で囚われの身にさえなった我が国における唯一人の経営学者、それが北川宗藏であった。

以上のように、もっぱら経営学批判に没頭した戦前・戦中期の北川にとって、経営学なる学問は一体どのように性格づけられたのか。北川が批判した資本家的経営学、それは企業資本家の立場に立ち、彼の実践的利害を代弁する市民的経営学であり、それゆえ資本主義企業が展開する運動を法則的に認識する科学の立場とは本来的に無縁なものである。だからこそ、そうして真の科学からは程遠い経営学の基本的性格が最も如実に現れたドイツ経営学に対して、北川はこの上なく厳しい批判を浴びせたのである。その結果、中村福治によれば、「北川にとって経営学はその批判を通して学問としての建設をめざす対象ではなく、ただ批判あるのみとなった³⁾」とか、「北川にとって、資本主義企業を対象とした経営学は全く成立の余地がない⁴⁾」、などと結論づけられることになる。だが、戦前から戦中までの時代に、北川は経営学に対して一体どのような思いを抱いていたのか、果たしてそれを中村のように結論づけてよいものだろうか。

私の考えは中村の見解とは違っている。たとえ資本家的経営学の批判に没頭していた時代といえども、北川の頭の中には絶えず真の経営学が、すなわち同じ資本主義企業を対象にしながらも、その本質や運動法則を科学的に認識する新しい経営学の姿が描かれていた、私にはそのように思えるのである。なぜなら、北川のように資本家的経営学を正しく批判しようとするなら、そこにはどうしても資本主義企業の本質に関する科学的な認識が対極物として存在せざるを得ないからである。もしそうでなければ、資本家的経営学への正しい批判、すなわち経営学批判も科学的に十全には為し得ないだろう。その場合、資本家的経営学の対極に位置して、資本主義企業の本質を科学的に認識し究明する経営学、それこそ戦後になって北川自身が提示するようになる真の経営学、あるいは新しい経営学、つまり「批判的経営学」であることは言うまでもない。資本家的経営学の非科学性に対し厳しい批判を展開しようとするほど、その対極には資本主義企業の法則的認識を任務とする批判的経営学の存在が不可欠となる。そうした批判的経営学を言わば鑑とし、それに照らし出されることによって、資本家的経営学の非科学性もはじめて暴露され得る。こうした考え方に立てば、たとえドイツ経営学批判に取り組んでいた戦前・戦中期の北川であっても、常に批判的経営学の姿が頭の中に描かれていたことになる。したがって、北川にとって資本主義企業を対象とした経営学は全く成立の余地がないとした中村の見解に対し、私自身、重大な疑問を投げ掛けざるを得ない。そうした疑問は、中村も自らの著書で引用している北川の文章によって、ますます大きく膨らんで行く。ここで少し長くなるがそれを引用しておこう。

「俗人的な資本家の企業経営という立場を去って、真の計画経済における企業経営の立場を展開するといふ立場に立つときには、資本主義の枠内においてであるにせよ、社会的生

産の中でそれの一環として企業が如何なる法則に支配されしたがって如何なる本質のものであるかが問はれねばならぬものとなって来るのである。しかもかかる形態においてのみ、経営経済学は真の学問となり、企業経営といふ実践の見地から企業の本質 = 法則をとらへんとする法則学すなはち真の学問となることのできるのである⁵⁾」(旧仮名づかいのまま、傍点引用者)。

上記の文章、それは紛れもなく北川の手によって1940年の戦中期に書かれたものである。ファシズムの嵐吹きすさぶ社会情勢の下でドイツ経営学が如何に反動化して行ったのか、その点を厳しく批判した論文の中で語られた文章である。そこで彼は、明らかに資本主義企業を対象としながらも、その本質を法則的に認識することが可能であること、しかも、そうして成立する経営学こそが真の学問であることを高らかに宣言している。この一文からも明らかのように、北川は戦中期という困難な社会状況の下でも資本家的経営学を精力的に批判しながら、同時に、資本主義企業の法則認識を可能にするような経営学の存在を、すでに頭の中にはっきりと描いていたのである。

では次に、戦後になって北川の経営学研究がどのように展開されたのかを見てみよう。その問題を検討するのに、最も貴重な素材となるもの、それが1953年に北川の著した論文「経営学の本質と類型に関する基本的考察」(以下「経営学の本質と類型」と略記)であることは言うまでもない。この論文の中で、北川は資本主義企業を対象に据え、そこで生起する重要な問題を科学的に考察した上で、その内部に貫徹する法則を認識しようとした。まさに、資本主義企業の運動を批判的に検討する作業を通してそのうちに潜む本質を究明すること、それこそが自らの構想する真の学問 = 批判的経営学の任務だと宣言したのである。

だが中村は、そうして戦後の北川が批判的経営学を建設するために著した記念碑的な論文に対しても、極めて低い評価しか与えていない。すなわち、北川の論文「経営学の本質と類型」なるもの、それは彼が学位申請のために急遽書いた副論文にすぎず、しかも批判的経営学の提唱は、「経営学を学問体系として打ち立てることはできないという見地に立っていた北川にとって、逸脱した見地であった⁶⁾」(傍点引用者)と言う。こうした中村による北川評は、果たして正当なものと言えるだろうか。彼の見解とは異なり、私はこの「経営学の本質と類型」なる論文に北川の経営学研究への熱い思いが込められ、論文の標題通りに経営学の本質論に関するエッセンスが展開されたものとして積極的に評価したい。この論文全体を通して、北川が予てから考えていた批判的経営学の内容を成す根本問題が語られている。すなわち、まず経営学の研究対象は 個別的産業資本 であり、しかもそれは「経営 - 企業」の弁証法的二重構造を内包するものであること、また、そうした研究対象を認識する方法は 対象的認識と実践的認識との統一 という性格を持つことが明らかにされている。さらに、そのような経営学方法論

に関する考え方を基礎にして、具体的な経営学の内容を成す幾つかの重要な問題が究明されて行く。それは、所有と経営の分離という現象がなぜ発生したのか、また資本主義企業における労働生産性と利潤原理の関係をいかに捉えるべきか、等のいずれも未だに議論の尽きない経営学研究にとって根本的な問題ばかりである。こうして北川は、自ら構想する批判的経営学なる学問の方法と内容について、その基本的な枠組みを提示したのである。以上のような重要な意味を持つ論文「経営学の本質と類型」を、学位申請のための副論文だからという理由で軽視してはならない。また、戦前・戦中期での北川の経営学批判から発展して、文字通り新しい学問である批判的経営学へ移行したからといって、それを「逸脱している」と否定的に評価するのも正しくない。さらに中村は、前述の如く「北川にとって、資本主義的企業を対象とした経営学は全く成立の余地がない⁷⁾」と断じているが、そうした評価も北川が著した論文自体によって覆されているのである。

4. 北川と中村の接点

これまで、北川宗藏という一人の研究者を対象にして、中村福治がその人物と学問をどのように捉えたのかを概説してきた。では、一体なぜ中村は北川研究に取り組んだのか、そうした出発点に立ち戻るような問い掛けをして小論を締め括りたい。中村自身、もともと経営学分野を専門にしていたわけではない。その彼が、卒然として北川研究に情熱を傾け、一冊の書物を上梓するまでに至るのだが、果たしてそこには如何なる理由が潜んでいたのか。その疑問を解く鍵は、北川と中村という二人の研究者の接点を見出すことに求められるだろう。

北川が生きた戦前から戦中にかけての時代、当時の研究者にとっては自由な学問の道が阻まれ、いわば彼らは研究への良心を犠牲にしなければならないほど、極めて過酷な社会状況の裡にあった。多くの経営学者たちが進んで民主主義を圧殺する国家体制に与して行く中で、ただ一人、勇敢にもそうした時代背景に抗しながら、資本主義企業やそれを対象とする資本家的経営学を徹底的に批判した人物、それが北川宗藏であった。何物をも恐れず、真の学問に向かって突き進んだ研究者の姿勢とその生き方に、きっと中村は強い共感を覚えたに違いない。彼は言っている、「北川の生涯は、その時代を鋭敏に反映した典型的な一知識人の歩みであった。このことこそが私が北川に心をひかれたところである⁸⁾」と。

では中村は、一知識人であった北川の歩みについて、一体どこに強く心をひかれたのか。それは、二人の研究者の間に共通する接点のうちに見出される。そうした両者をつなぐ共通の接点として、次のような二つの事実を指摘しなければならない。第1は、研究分野の広がりと同なりという点である。前述のように、北川は単に経営学だけでは満足できず、経済学、哲学にまで研究の裾野を広げ、しかも三分野のそれぞれで独自性のある優れた成果を打ち出した。そ

れには、たとえ3人の各専門分野の研究者たちが寄り集まったとしても、おそらく太刀打ちできなかったのではないか。他方、もう一人の研究者である中村はどうか。彼も経営学だけでなく、日本の近代史から経済学、哲学、さらに近年では朝鮮近現代史へと研究分野を広げて行き、それぞれの領域で数多くの成果を生み出し続けてきた。こうして北川と中村の間に研究分野の広がりや重なりが確認でき、そのような事実こそが中村の心に北川への強い共感を齎したと考えられる。

次に第2の接点として、月並みな表現になるが、学問研究への熱意あるいは姿勢といったものを挙げなければならない。北川が自らの研究に傾けた旺盛な情熱、また研究への真摯な取り組み方には、まさに人並みはずれたものがあった。戦時中に監獄で囚われの身となり、明日の命さえどうなるか分からない時にも、「頭の中に一冊の本を書きつづっていた⁹⁾」というほど、絶えず研究への情熱を燃やし続けたのである。そして脳腫瘍の病に倒れる最期まで、我が身を削りながら研究一筋に生きた人物であった。他方、中村はどうか、彼の研究にかけた情熱と姿勢も尋常ではなかった。それは、前述のような北川研究の方法のうちに、また晩年、彼が肝臓を患って体が次第に衰弱して行った時期にも示された。彼は通常の研究者の何倍も研究し、58歳までの短く限られた時間に膨大な研究成果を生み出した。言わば自らの命と引き換えに研究に邁進した人物であった。このように、根っからの情熱的な研究者という共通の研究姿勢、そこにも両者の間に重要な接点があったことは間違いない。

果たして中村福治という研究者は、その北川研究を通して一体何を我々に遺したのか。もちろん、彼の手によって初めて人間・北川宗藏の真の姿が浮き彫りにされた。だが、そうした成果だけではない。北川と同様、中村はその生涯の生きざまを通して、一人の典型的な研究者としての歩みを遺したのではないか。

<追記>

福ちゃん、俺より若いのに先に逝っちゃったな。さぞかし残念だったろう、悔しかっただろう、君のことだ、まだまだやりたいことが沢山あったに違いないから。君との思い出、そりゃ何といっても北川宗藏だよな。それでこんな駄文を書いてみた。「相変わらず甘いな、田中さんは」、そんな君の厳しい批判の音が、どこからともなく聞こえてきそう。ずっと寂しいが、今ふと、君があので北川と語り合っている姿を想像して、思わずニヤリとしたよ。

注

- 1) 田中照純『経営学の方法と歴史』ミネルヴァ書房, 1998年, 173 - 175頁。
- 2) 中村福治『北川宗藏 一本の道をまっすぐに』創風社, 1992年, 215頁。
- 3) 同上, 85頁。
- 4) 同上, 85頁。
- 5) 北川宗藏「私経済学否定論」(『内外研究』第13巻第2号, 65頁)。
- 6) 中村福治, 前掲書, 222頁。
- 7) 同上, 85頁。
- 8) 中村福治, 前掲書, まえがき iv 頁。
- 9) 松井紀子「父の思い出」(『北川宗藏著作集』<第1巻>, 千倉書房, 1982年, 付録, 3頁)。

In Connection with the Study on “A Human Being : Sozo Kitagawa” Remains Left by Fukuji Nakamura

If we look back at the history of business administration in Japan, we can imagine an attractive student in this special field. His name is Sozo Kitagawa. On the other hand there is another student who investigated the life of Kitagawa. His name is Fukuji Nakamura. In my paper I deal with these two students.

Nakamura studied the life of Kitagawa with a unique method for his research, but he made little of the study of business administration that was made by Kitagawa after the World War . But in my opinion, on the contrary, we must attach importance to the study of business administration made by Kitagawa after the war. And I think that Kitagawa wanted to establish the scientific business administration in that age. And in fact, he did it himself in his dissertation for a doctorate.

Finally it is confirmed that two students, Kitagawa and Nakamura, had several kinds of common features. Namely they both had the great spirit of study on the one hand, and they had also the similar special fields of study on the other hand.

(TANAKA, Teruyoshi 本学経営学部教授)